The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プルーストとワスレナグサ : 『失われた時を求めて』におけるその花言葉をめぐって
Author(s)	阪村, 圭英子
Citation	Gallia. 2005, 44, p. 9-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6261
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

プルーストとワスレナグサ
――『失われた時を求めて』におけるその花言葉をめぐって ――

阪村　圭英子

はじめに

プルーストの小説『失われた時を求めて』を彩る多くの花々のなかに、重要なメッセージをになった名前を持つものがある。それはワスレナグサである。小さな青い花を咲かせるこの植物の学名はmyosotisであるが[1)]、一般にはne-m'oubliez-pas（forget-me-not）と呼ばれることが多い。「私を忘れないで」というその呼称は、もともとドイツの民話に由来する。川辺に咲く青い花を恋人の望むままに摘もうとした青年は、足を滑らせ渦巻く水のなかに落ちる。濁流にのまれ溺死する前に、彼は恋人の方へとその花を「私を忘れないで」と叫びながら投げたという。

プルーストは小説のなかで、ワスレナグサを計11回登場させている。特に印象に残るのはこの花に託された伝言が問題となる場面である。その花言葉に拠り所を求めたのは少年少女ではなく、小説内でもっとも特異な登場人物のひとりであるシャルリュス男爵である。社交界に君臨する傲慢な大貴族とこの可憐な花との意外な結びつきは、彼が青年の主人公に対して露骨な興味をあらわにする場面で呈示される。男爵が用いたワスレナグサは、研究者たちの注意をひいたことは確かだが、花言葉のメッセージがあまりにも明白すぎるためか、かえってあまり読みこまれていないように思われる[2)]。ここでは、独自の視点からワスレナグサの伝達機能を再検討してみたい。

Ⅰ　シャルリュス男爵とワスレナグサの装幀

主人公がシャルリュス男爵と最初に出会うのは、「コンブレー」のすれ違い的な出会いを別にすれば、第二篇『花咲く乙女たちのかげで』における、夏のバルベック滞在の物語の一場面である。青年はこの海辺でヴィルパリジ夫人や夫人の甥サン＝ルー侯爵など憧れのゲルマント家の人々の知遇を得る。彼はサン＝ルーの

プルーストのテクストは以下を使用。 *A la recherche du temps perdu*,«Bibliothèque de la Pléiade», 4 vol., Gallimard, 1987-1989. 引用内の下線はすべて論者による。各引用後の括弧内に出典の巻数番号とページ数を記入する。

1）学名myosotisの語源はギリシア語のネズミの耳である。葉の形が丸く毛が生えているためにネズミの耳のように見えるからである。

2）たとえば、Annick Bouillaguet, *Proust Lecteur de Balzac et de Flaubert*, Champion, 2000の前書きのなかでBrian G. Rogersは、プルーストが記号や暗号でものごとを伝える傾向があることを示唆する一例としてシャルリュスのワスレナグサについて触れている。Claude Meunier, *Le Jardin d'Hiver de Madame Swann*, Grasset, 1995では、ルグランダンと男爵がともに同性愛を打ち明ける役目を花に与えていることを指摘する例としてこの花が提示されている（p.54）。

叔父シャルリュス男爵がバルベックに到着する前に、すでにこの若い貴族から叔父の噂をいろいろ聞かされていた。主人公は友人の話しぶりから、くだんの叔父が傲岸不遜な美男であり、大貴族の風格を漂わせながら威風堂々と到着するのを想像する。ところが、主人公がじっさいに目にしたのは、想像とはまったくかけ離れた人物であった。

紹介される前から男爵は、奇妙なそぶりで主人公に何度も鋭い視線を送ってきた。その様子から、青年は昔、タンソンヴィルの庭先で、スワン夫人のかたわらで少年の自分をむさぼるように見つめていた男がこの男爵であったことに気づく。こうして作家は、主人公を二度も男爵の凝視の対象とするが、男爵が彼に異常な関心を示すわけを語り手に説明させない。一方、主人公は男爵の同性愛嗜好を示唆する振る舞いに戸惑うばかりで、そうと気がつかない。

語り手は、男爵が同性愛者であると想像しなかった理由を並べ立てている。タンソンヴィルではスワン夫人の愛人であるという噂があった。バルベックではサン＝ルーの言葉どおり、男爵は男らしさを誇示して、女性たちに愛され、めめしい男性を嫌悪し、自分に言い寄った男を半殺しの目にあわせた粗暴な色男のように見えた。けれども語り手は、男爵が若い男に冷酷に当たるのは、愛した者に裏切られたという悲哀の反動のようだとつけ加えることも忘れない。また祖母が、シャルリュスの荒々しい言動の裏にひそむ女性的な繊細さを認めたことも言及している。こうした男爵の言動は若い主人公にとって、謎めいた、理解しがたい暗号で構成されているかのようだ[3)]。

ワスレナグサが登場するのは、男爵が主人公の部屋に届けてくれた本の革装幀の絵柄のなかである。シャルリュスは、主人公が夜に不安に陥ることを聞き、慰めようとしてベルゴットの作品を持ってきてくれた。主人公の方は自分の弱さがさげすさまれるのではないかと恐れていたが、意外にも男爵はやさしく理解してくれたので、かえって感動する。しかし、その翌日には、どういうわけか機嫌をそこねた男爵から口汚くののしられ、本を直ちに返却するよう言われる。主人公は困惑しながら本を返す。ところが、その本が、パリに戻った男爵から再度、バルベックの彼のもとに送られてきた。

> [...] quelque temps après je reçus --- dans une reliure de maroquin sur le plat de laquelle avait été encastrée une plaque de cuir incisé qui représentait en demi-relief une branche de myosotis --- le livre qu'il m'avait prêté [...]（II, 126）

主人公は、貴重な装幀の表紙に一本のワスレナグサが浅浮彫りで描かれているのを認めている。しかしながら彼は、この本を受け取っても、感謝の気持ちが湧かない。男爵が去り際に放った無礼な言葉を後悔して贈物をしてきたとしか考えないのである。だから青年は良家の子息にはあるまじき欠礼をしてしまう。こ

3）無邪気な主人公と狡猾な語り手の関係については、以下を参照。Antoine Compagnon, «Le Narrateur en procès», *MARCEL PROUST* 2, CAEN, 2000, pp. 309-334.

のプレゼントに礼状さえも出さなかったのである。しかしこのことは後の章まで明らかにされない。

ワスレナグサが伝えるメッセージがじっさいに話題となるのは、第三篇『ゲルマントの方Ⅱ』第二章にいたってからである。パリ社交界の頂点、ゲルマント公爵家に招待されるようになった主人公は、公爵夫妻の晩餐会に出席した後、サン＝ルーに頼まれシャルリュス邸に出かけてゆく。彼はバルベックから戻ったあとパリで男爵と再会し、親しく話すようになっていたために、先ほど公爵邸で耳にしたよもやま話を男爵に伝えたくてたまらない。わざわざ男爵が自分を呼び寄せた理由については一考もしない。ここでは主人公の若者らしい自己中心的な心理が強調されている。

この訪問の場面で、またも青年の言動は男爵の逆鱗に触れてしまう。そのときシャルリュスはこの花についての糾弾を始める。«[...] vous prétendez que vous n'avez pas reçu mon message --- presque une déclaration --- d'avoir à vous souvenir de moi? Qu'y avait-il comme décoration autour du livre que je vous fis parvenir?»（II, 843）

この問いに対する主人公の返答が興味をひく。彼は、«De très jolis entrelacs historiés»（「とてもきれいな飾り模様の組み合わせ」）と答えるのみで、肝心のワスレナグサの文様には触れようとしない。ベルゴットの本を受け取ったときには、花の種類を見分けたが装幀のデザインには何も言及していなかった。ところが反対に、男爵の前では花についてはまったく語らない。「私のことを覚えていなければならない」という力を込めた男爵の告白（déclaration）を無視して、青年はもってまわった答えしか返さないのだ。彼の脳裏からワスレナグサのイメージは完全に消えていたのだろうか。男爵はこのはぐらかしを聞いてますます激昂し、話題を転じて、バルベックの教会はすばらしい中世建築の傑作であるのに、二時間もその前で過ごした相手の青年がなにも見ていないといって軽蔑をあらわにするのである。

> [...] vous n'avez même pas reconnu dans la reliure du livre de Bergotte le linteau de *myosotis* de l'église de Balbec. Y avait-il une manière plus limpide de vous dire : "Ne m'oubliez pas" ?（II, 843）

ところが不思議なことに、主人公は、教会のまぐさ石（玄関上部の水平な石）に彫られた花文様の区別もつかず、「忘れないで」のメッセージさえも解読できないと非難されても、いっこうに動揺も後悔も示さない。それどころか、彼は激怒する男爵の様子を冷静沈着に観察している。一方ワスレナグサに関する男爵の苦情は延々と続く。主人公がその本を受け取ったことの礼状すらもくれなかったというのだ。シャルリュスは、礼儀正しいブルジョワの子弟ならば、せめて一筆とるのは当然ではないかと泣かんばかりに訴える。だが主人公の方は、バルベックで受けた悪態の詫びに届いた本と思っていたので、特にきまりの悪そうなふりもしない。彼はむしろ憤慨している。男爵の怒りを引き起こしたのは、誰かが自分

が男爵の悪口を言いふらしていると根拠のない風評を流したからだと思い、その件に関する申し開きが受け付けられなかったからである。

本来誤解の中心にあるはずのワスレナグサに関して、青年がまったく無視しているのは不自然である。これは何を意味するのだろうか。花言葉に気がつかなかった不明を恥じているのだろうか。もしくは、女性的行動を嫌悪しているはずのシャルリュスが花言葉などに思いを込めたことに驚愕しているのだろうか。ここでは、別の角度から主人公の心境を考えてみよう。

見事な装幀本を手にした主人公は、ワスレナグサが「飾り模様の組み合わせ」で表現されていることには気がついていた。彼は男爵が教会の建築について言及する前に、すでに建築用語である«entrelacs»と柱頭の人物彫刻や聖書の装飾挿絵を意味する«historiés»という語を用いて返答している[4)]。つまり、彼はそれがバルベックの教会で見たワスレナグサの文様であると認識していたが、故意に花の名を男爵に告げることを避けたのではないだろうか。主人公は、こよなく花を愛する文学青年で、バルベックにおいてもリンゴの花について詩的な語りで男爵を感動させていた（II, 849）。その彼がワスレナグサの通称に他ならない花言葉を知らないはずはない。いや、その意味を熟知しているからこそ、この明確なメッセージをあえて無視したのではなかろうか。

バルベックで会った男爵は解読不能なほど謎めいた人物であった。とりわけ、男性的な見かけと性格の背後にひそむ女性的な感受性は主人公を困惑させた。その最大の証拠がベルゴットの著書だ。主人公を驚かせた男爵の心優しい気配りを示す一方で、主人公への最初の愛の告白となっているのだ。深夜に、書物をたずさえて彼の寝室にやってきた男爵は、「人の心をそそる青春」の持ち主である主人公に「報いられぬ愛」について語り、なかなか部屋を立ち去ろうとしない。翌日には、突然なれなれしく彼の首筋をつまんでびっくりさせる。冷酷な暴言、過度の親密さとのあいだを激しく揺れるシャルリュスの言動は、同性愛のなんたるかを理解しない主人公には、ほとんど支離滅裂なシーニュでしかない。とはいえ青年は自分なりにそこに「異常な趣味」をかぎ取っていたのだ。だからこそ再度手元に届けられた本にこめられたメッセージには無関心を装ったのである。彼はいつか男爵からこの件で非難されることを予想していた。ワスレナグサの一件は、なかば無意識に自己防御を図る青年の巧妙な処世術を示している。

同じような心理的駆け引きはその後の場面でも続く。彼が男爵邸を立ち去ろう

4）Anne Dumas, *Les Plantes et leurs symboles*, Editions du Chêne, 2000, p.113によると、ワスレナグサはかっては「神の花」と呼ばれ、キリストやマリアの表象物とされていた。しかし、画家エルスチールがバルベックの教会に幻滅していた主人公に、その美についての教えを授けるとき、彼はその正面入り口を«la plus belle Bible historiée»と讃えたが、花のモチーフは話題にならなかった（II,196）。実際にワスレナグサが教会の装飾に使用されていたことを示す事例をラスキン、エミール・マールなどの資料で調査したが、いまだ不明である。サンザシのまぐさ石ならばブールジュにある（*Contre Sainte-Beuve*,«Bibliothèque de la Pléiade», 1987-89, p.81）。尚、Viollet-Le-Duc, *Dictionnaire raisonné de l'Architecture française du XIe au XVIe siécle* の「花」の項目には、プルーストがロベール・ド・モンテスキウの偶像崇拝例として取り上げたヴェズレーのケマンソウ（同, p.136）を含む多くの事例が記載されているが、そのなかにもワスレナグサはない。

とするとき、ベートーヴェンの「嵐の後の歓喜」が聞こえる。シャルリュスがこのドイツの作曲家を好み、しばしば人に聞かせようと演奏家たちを自宅に呼ぶことはすでにサン＝ルーから聞いていた。ここでも、罵詈雑言の直後に「嵐の後の歓喜」を提供するという見え透いた男爵の演出は、主人公をうんざりさせる。そこで、男爵がこの曲に言及したときも、彼は«je demandai naïvement par quel hasard on jouait cela et qui étaient les musiciens.»（II, 850）と、相変わらず強引に無知を装う。

こうしてワスレナグサは、その花言葉で、主人公と男爵の一連の葛藤を導入する役割を果たしていた。では、小説の他の部分においてこの花がどのような使われ方をしているのか、その花言葉がどのように扱われているかをみてみよう。

II　コンブレーのワスレナグサ

小説のなかでワスレナグサが頻繁に登場するのは、主人公が春の休暇に滞在するコンブレーである。ここでもまた、この花は教会に結びつけられている。最初の登場場面は、サン＝チレール教会の内部を描写する文章である。すなわち、青いステンドグラスを透過して差し込む光線の比喩に使われる。最初は煌めくステンドグラスからの光は、まずサファイアのように澄んだ硬質の青に喩えられる。この教会描写は、墓石、石畳、大理石の白いスミレ、鍾乳石、岩天井などの語彙が並立し、温かみのない鉱物のイメージで構築されている。主人公たちがコンブレーにやってくるのは復活祭の前であり、まだ寒くてどこにも花は見当たらない。しかし作家は、２ページにわたるこの描写を「ガラスでできたワスレナグサの輝く金色の絨毯」«ce tapis éblouissant et doré de myosotis en verre»（I, 60）で終えている。春を待ち焦がれる少年の心情を表わすために、無機質の宝石の煌めきは、小さな青の花々に変貌するのだ。教会の敷石の上で少年の足元に広がる光は、暖かい金色に輝く絨毯となり、ガラスの青い反映はワスレナグサの花々となって、いっせいに花々が咲き乱れる季節が間近であることを予告する。

次にこの花は、主人公たちが散歩の途中に通りかかるタンソンヴィルのスワン氏の庭に咲いている。このあとにジルベルトとの出会いが待っている。

> C’est ainsi qu’au pied de l’allée qui dominait l’étang artificiel, s’était composée sur deux rangs, tressés de fleurs de myosotis et de pervenches, la couronne naturelle, délicate et bleue qui ceint le front clair-obscur des eaux, [...]（I, 135）

語り手は、この庭や水辺の植物名を詳細に挙げながら、散歩道の風景を描き出す。ワスレナグサは池の傍でツルニチニチソウと青い王冠を作り、グラジオラスは百合に似た花を広げ、ヒヨドリハナとトチカガミは水に浸って生えている。ワスレナグサとスワン氏の庭との観念連合は堅固であって、「スワンの恋」のなかでスワン氏が田舎の庭を思い出すときにも、「ワスレナグサとグラジオラスに囲まれた池」«l’étang cerné de myosotis et de glaïeuls»（I, 266）を想起している。その後

何十年もの歳月が流れ、戦火を避けてタンソンヴィルの館に住むジルベルトも、手紙のなかで庭に咲くワスレナグサを話題にする。«Gilberte ne tarissait pas sur la parfaite éducation de l'état-major et même des soldats qui lui avaient seulement demandé "la permission de cueillir un des ne-m'oubliez-pas qui poussaient auprès de l'étang" [...]（IV, 331）» このスワンの庭では、上記以外にも多く種類の花が咲いているのだが、作家はなぜか執拗にワスレナグサに執着しているようだ。そこで、この部分の草稿資料にあたり、この花の生成過程をみてみよう。

この花が最初に庭の場面の草稿に登場するのは、カイエ12（エスキスLIV）のスワン嬢出現の場面である（I, 818-819）。語り手は、ある日スワン氏の庭でその娘がツルニチニチソウ、ロベリア、ワスレナグサ（myosotis）と青色系統の花を摘んでいるのを見かけたことを思い出す。彼女の目も青い色をしていた。プルーストによく見られる換喩の典型的な例である。«Elle avait elle-même les yeux singulièrement bleus, pas précisément beaux, pas grands, comme deux petites fleurs de < ne > -m'oubliez-pas d'un bleu doux et nullement transparent.» 語り手を見つめる少女のワスレナグサの目は、そのあとも «les deux petites fleurs de myosotis semblèrent sortir légèrement des paupières, me toucher» のように、再度この花に喩えられる[5)]。

キリスト教の伝統で青色は聖母マリアの謙虚さを象徴する色彩として使われるので、ここでもこの色は処女の清楚なイメージを強調するという考察もあるが[6)]、この「私を忘れないで」と告げる花の目は少年に驚くほど熱い恋の告白のように映る。同じカイエ12にある別のエスキスLVIIIでは、彼女の青い目に関して花の比喩は削除され、かわりに紫色の鉱物のイメージが導入される（I, 846-7）[7)]。しかし、ワスレナグサがスワン嬢のまわりから消え去ったわけではない。ここで初めてジルベルトという名前が登場し、そしてやはりne-m'oubliez-pasがまず少女のアイデンティティーを提示するイメージとして記される。プルーストはそのあともジルベルトの名の神秘性を語るときに、他の花ではなくmyosotisにのみ言及している。

ところが、年代的に少し後のカイエ14（I, 848-849）の草稿になると、ne-m'oubliez-pasは、もはやジルベルトの周囲に見出すことはできない。その代わり、学名のmyosotisが、主人公が彼女をはじめて見かける水辺に咲いている。ここでは決定稿と同じように、グラジオラスとツルニチニチソウの植込みにmyosotisが縁を飾る小道が描かれている。さらに、スワン嬢はクマツヅラとmyosotisが縁飾りとなった小道の前で読書している。プルーストは、青い目で少年を見つめるジルベルトから、「忘れないで」と語りかけるこの花を完全には切り離そうとはしな

5）Akio Wada, «La création romanesque de Proust : Etude génétique sur la première apparition de Gilberte», *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, N° 54, 1989, pp.126-140,を参照。

6）Claudine Quémar, «Sur deux versions anciennes des "côtés" de Combray», *Etudes proustiennes II*, pp.159-282, p.278.

7）和田章男、「『失われた時を求めて』の創作過程におけるゲルマント夫人像の変遷―初登場の場面をめぐって―」、ガリアXXXIV, 1994, p.59を参照。

いのである。しかし、これ以後その花は学名でしか呼ばれない。作家はこの場面の花々の選別に苦心し、可能な限り学名を避けようとしていたのだが[8]、ワスレナグサの場合この草稿以降は俗名が庭の記述に現れることはない。それはジルベルトの視線の意味合いが変化したためであろう。初期の草稿における愛の告白をする青い目の比喩にはne-m'oubliez-pasの俗名に整合性があった。しかし、その後彼女の目の色はより複雑なニュアンスを帯び、最終的にはその色も黒か青か決定しがたくなる。視線の意義も単純な愛の告白ではなくなり、少年の主人公には解読不能なあまり、侮蔑的にさえ思えるのだ。ワスレナグサでは直截に解答を提示するようで、謎かけにはふさわしくない。草稿段階における花の比喩の消滅は不可避の選択であった。少女の好意を表すメッセージは彼女の身ぶりに移行する。

だが、カイエ14にあとから書かれたエスキスLXにおいても、より決定稿に近くなった庭の描写にmyosotisが見出される。だから、この花はジルベルトから完全に切り離されたわけではない。

> «L'allée qui passait autour de l'étang lui tressait sur des rangs étroits et pressés une double couronne délicate et bleue de pervenches et de myosotis, cependant que se penchaient sur ses bords, les pieds même dans l'eau, l'eupatoire, la grenouillette, et laissait pendre les lambeaux bleus et jaunes de sa capsule éclatée, le glaïeul des marais. Et quelques feuilles du nénuphar semblaient avoir été jetées sur la surface de l'eau.»（I, 850）

ここでプルーストにこの庭の花に関してインスピレーションを与えたかもしれない絵画を取り上げておこう。それは、ジョン・ラスキンが擁護したラファエル前派の画家のひとりであるC.A.コリンズ作『修道院の想い』である。プルーストはこの絵に描かれた植物のサジオモダカに強い関心を示していた[9]。色美しい挿絵入りの聖書を片手に立つ修道女の足元では、青い縁飾りとなって咲くワスレナグサが印象的である。さらに白や橙色の百合が前面に咲き、グラジオラスも水の上に傾いており、彼女の姿を反映する水面には睡蓮とサジオモダカが咲く。この修道院の庭の植生は、草稿中のスワンの庭と驚くほど類似しているではないか。共通項は、鏡のような池、ワスレナグサやグラジオラス、百合、睡蓮だけでない。

ここでは引用していないが、スワン嬢の釣竿は睡蓮の葉陰にいる魚が引く浮きで揺れている。コリンズの絵でも睡蓮のそばで金魚が泳ぐ。そのうえ、スワン氏の庭は宗教的雰囲気と無関係ではない。作家はその周囲で白いサンザシが咲く生垣を聖母の祭壇に喩え、薔薇色のサンザシをカトリック的な灌木と呼ぶ。詳細な植物名の列挙に彩られた初恋の少女との出会いの場面を書くにあたり、プルース

8）Lucien Daudetとのあいだに交わされた花の名前をめぐる書簡に、学名についての記述がある。*Correspondence de Marcel Proust*, XII, p.264.

9）この絵に関しては拙論「プルーストの花体系における睡蓮についての考察―コンブレーの散歩の場面を中心に―」関西フランス語フランス文学第10号、2004, pp.60-71を参照。

トは宗教的な花々を凝縮したようなコリンズの作品を参照したのではないだろうか。ワスレナグサは、当初は少女の目となり恋を訴える存在であったが、その重要な役目をなくしたあとも印象的な小花のモチーフとして彼女の背景から消え去ることがない[10)]。

最後に、プルーストが小説内でワスレナグサの二つの花名を意識的に使い分けていることにも触れておきたい。語り手がこの花に言及するとき、シャルリュスの告白の場面までは一貫してジルベルトの目から消えたne-m'oubliez-pasの名を避けて、myosotisとしか呼ばない[11)]。反対にそのメッセージが明示されたあとは、あたかも男爵の教えに従うかのように、主に俗名で呼ぶようになる[12)]。この花を女性の目に喩えようとする作家の意図はシャルリュスに受け継がれる。彼が再びその花言葉を話題にするのはモレルのコンサートにおいてである。けれども、もはや愛の告白に使用されているわけではない。男爵は、ゲルマント公爵夫人の目がne-m'oubliez-pasというdeux myosotisであるから、たとえ夫人がコンサートに欠席しても彼女を忘れるのは不可能だと主人公に説明する（III, 781）。こうしてmyosotisは、パリの貴族の館（III, 147）でも墓地（IV, 141）においても、さらにタンソンヴィルの庭においてさえもne-m'oubliez-pasとして咲いている。

結びにかえて

プルーストはワスレナグサのよく知られた花言葉を使うことに躊躇しなかった。やや陳腐にすぎるメッセージではあるが、作家はそれをもっとも効果的に利用しようと試みたのである。その適用例は生成段階の草稿に明白だ。初恋の少女が発するne-m'oubliez-pasの愛情表現は、やがて背景を飾るmyosotisとしか存在しなくなる。しかし、ありふれた花言葉はシャルリュス男爵から主人公に贈られ、その解釈をめぐる葛藤は後に男爵が同性愛者であったという事実が明らかにされる前の重要なプレリュードともいえよう。この場面を演出するために、それまでに小説内ではこの花は注意深くmyosotisという学名でしか使われていない。謎が判明してからは、反対に俗名ばかりが用いられる。〈名前〉の魅力を熟知していた作家は、ne-m'oubliez-pasという、つつましくもストレートなメッセージにこだわりつづけた。俗名と学名の巧妙な使い分けは、プルーストの独特な小説技法の一端を示しているように思える。

（京都大学人文科学研究所非常勤講師）

10）ノヴァーリスの『青い花』にみられる女性＝青の花の象徴性をこのワスレナグサと関連づけた論もあるが、この考察の目的は抽象的な青の花ではなく、ワスレナグサという個別の一種に注目しているために、ただ参照するのみとする。Rina VIERS, «La signification des fleurs dans l'œuvre de Marcel Proust», *Bulletin de la Société des Amis de Marcel Proust*, 25, 1975, p.157.

11）上記の例以外にもオデットの衣装のmyosotisがある。（I, 607）

12）これ以外にIV, 289には学名が使用されているが、これはゴンクールの『日記』というパスティーシュにおける使用なので、同列には論じられない。